

文化的景観保全を題材とした ワークショップにおける実践知に関する研究

田中 尚人¹・徳永 哲²

¹正会員 熊本大学准教授 政策創造研究教育センター（〒860-8555 熊本市中央区黒髪2-39-1）

E-mail: naotot@kumamoto-u.ac.jp

²非会員 代表取締役 (株)エスティ環境設計研究所（〒812-0028 福岡市博多区須崎町12-8）

E-mail: tokunaga@step-i.co.jp

三角西港は、熊本県宇城市三角町に位置し、『明治の三大築港』の一つに数えられる土木遺産であり、世界遺産国内暫定リストに記載された「明治日本の産業革命産業遺産」の構成要素でもある。筆者らは、三角西港を含む「三角浦」の文化的景観保全を目的として、行政職員と地域住民をそれぞれ対象としたWSを2回ずつ計4回行った。本研究では、ワークショップ・デザインから、地域住民と行政との協働の場づくりまでをアクションリサーチ形式で分析し、一連のWSにおける実践知を明らかにすることを目的とする。研究の成果として「誰かといっしょに、自分たちのことから、場をひろげ、三角西港らしくやる」という活動指針を得ることができた。

Key Words : *community, cultural landscape, local knowledge, participation and workshop*

1. はじめに

(1) 研究の背景

三角西港は、熊本県宇城市三角町に位置し、お雇い外国人技師者ムルデルの設計・指導により、1887（明治20）年8月に開港した『明治の三大築港』の一つに数えられる土木遺産である。また三角西港は、2013年9月に政府が国連教育科学文化機関（UNESCO）の世界遺産に推薦する方針を固めた「明治日本の産業革命産業遺産九州・山口と関連地域（仮称）」（福岡、長崎、熊本、鹿児島など8県）の構成資産の一つでもある。

「明治日本の産業革命遺産」は、19世紀後半より20世紀初頭にかけて、幕末から明治期の日本における重工業分野（製鉄、造船、石炭産業）の急速な産業化の道程を、時間軸に沿って証言する一連の産業遺産（現役産業施設を含む）により構成されている。現在、世界遺産を含む文化財保全の分野では、「有形、無形の文化財と地域の暮らしの共生」¹⁾が重要な懸案となっている。

筆者らは、この三角西港を核とする港町、三角の瀬戸などを含む「三角浦」の文化的景観保全のための、まちづくりワークショップ（以下、WSと略）に関わること

になった。このため、2013年10月から2014年2月に渡って、行政職員を対象とした庁内WSと地域住民を対象とした市民WSを2回ずつ、計4回行った。

(2) 研究の目的と手法

本研究では、これらのワークショップを通じて得られた実践知を、定性的に分析することを目的とする。

文化的景観とは、「地域における人々の生活又は生業及び当該地域の風土により形成された景観地で我が国民の生活又は生業の理解のため欠くことのできないもの（文化財保護法第二条第1項第五号）」と定義され、その要件としては、①歴史、②自然環境、③生活・生業が挙げられる。これらの要件の固有性を、総体と成立させている、地域アイデンティティの拠り所となる風景生成メカニズムを文化財とするものである。

筆者らは、この文化的景観保全を持続可能な地域づくりであると認識し、研究及び実践を行ってきた。本研究では、参加者の動機付け、成果物の提示なども含めたワークショップ・デザインから、その運営、関係者との情報共有まで、一連の地域住民と基礎自治体との協働の場づくりに関して、アクションリサーチ形式で分析した。

(3) 既往研究と本研究の位置づけ

文化的景観の評価や価値づけに関しては、地理学や歴史学、社会学や農学、生態学、建築学、ランドスケープ、都市計画、土木工学など様々な分野で種々の研究、報告書がみられ、平成20年度から(独)奈良文化財研究所が「文化的景観研究集会」を開催しており、詳しく報告書²⁾及び資料集³⁾にまとめられている。

研究対象地である、三角西港についても、これまで種々の報告書^{4) 5) 6)}が刊行されている。

筆者らは、これまでも文化的景観の保全は、地域住民と行政との協働の下で持続可能な景観まちづくり活動であると捉え、まち歩き⁷⁾やワークショップ手法^{8) 9)}によるアクション・リサーチを実践してきた。近年では、地域においてデザイン思考¹⁰⁾に取り組み、起業やコミュニティビジネス、六次産業化¹¹⁾に取り組む地域なども、自地域のアイデンティティを保全する拠り所として、地域固有の産業と景観や風景との結びつき¹²⁾について語ることが増えた。

本研究は、三角西港地区において現在進行中の文化的景観保全を契機とした地域住民と行政との協働過程を題材としている点、筆者たちが直接関わっている4回のワークショップを通じて得られた実践知を、アクションリサーチとして定性的に分析することに特徴がある。

2. 研究対象地と地域の現状

(1) 宇城市の概要

宇城市は、2005年(平成17)1月15日、宇土郡三角町・不知火町と下益城郡松橋町・小川町・豊野町が合併して発足した。面積は188.6km²、総人口は、60,304人(2014年5月1日)。

(2) 三角西港地区の特徴

三角西港は、古来より風よけの港して発達し、図-1に示したように、三角の瀬戸と一体的に整備されてきた。明治三大築港でもある三角西港は、築港前は東側の三角本町を中心としたひなびた漁村であったが、築港とともに都市計画された港湾都市となり、その後保養都市となった。現在は、一区/二区からなり、両区合わせて約150世帯、約320人の人口(高齢化率42.6%)である。

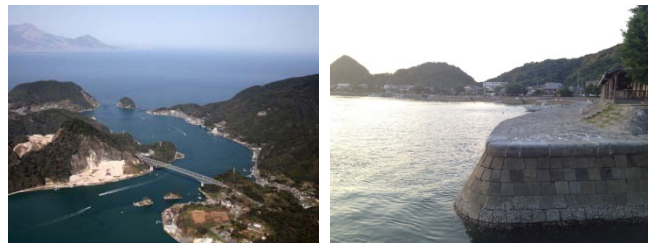


写真-1 三角の瀬戸全景

写真-2 三角西港石積護岸

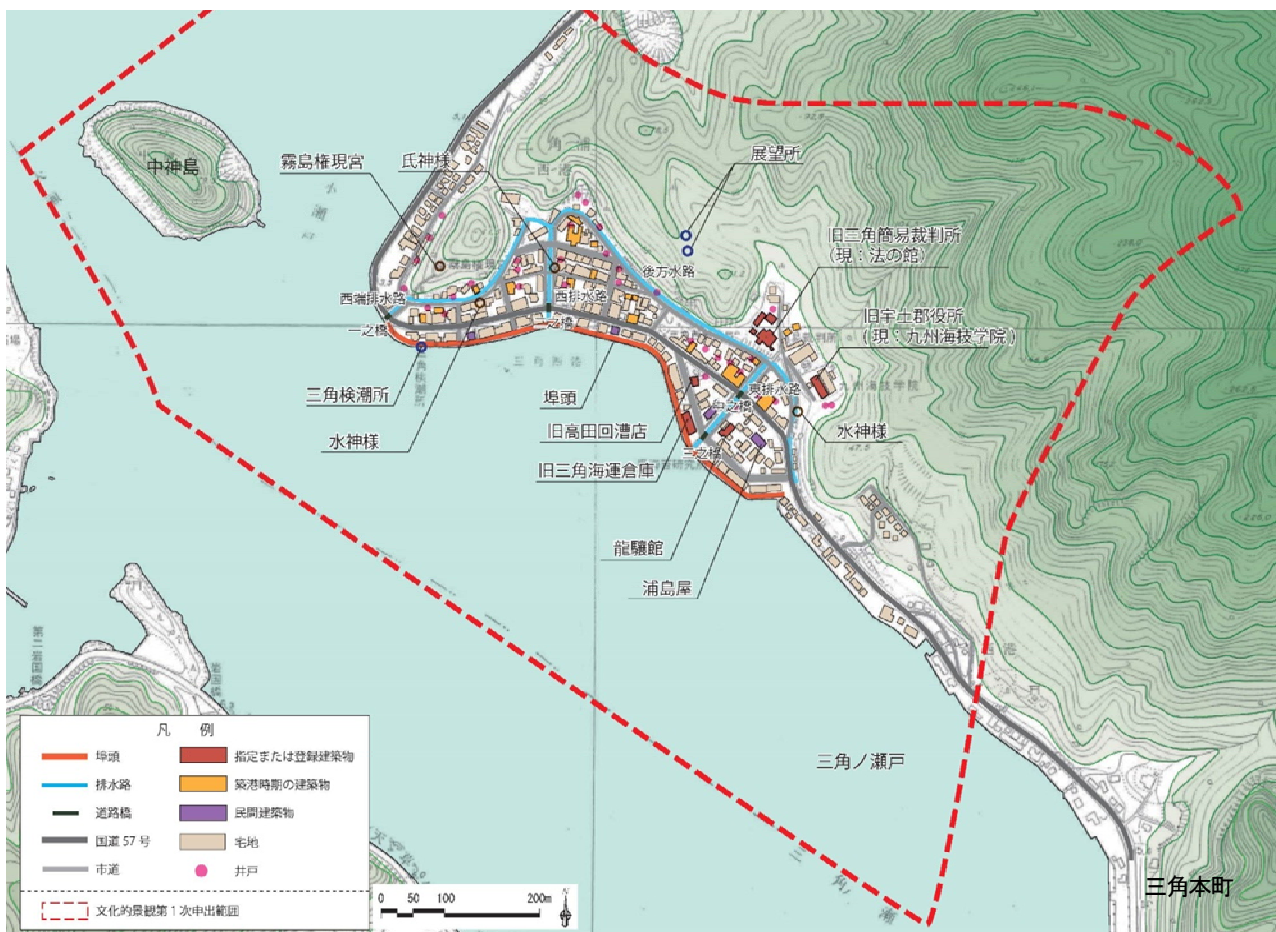


図-1 三角西港地区詳細図(エスティ環境設計研究所作成)

(3) 近年の三角西港を取り巻く状況

三角西港は、後に開かれた東港（元際崎港）にその主要な役割を移した後衰退し、1966年（昭和41）天草五橋が開通した後は、国道57号の通過交通が地区を分断していた。しかし、東港への機能移転が早かったこともあり、三角西港には石積護岸が残る港湾史跡として高く評価されるようになり、1987年（昭和62）築港100周年を期に、港湾整備事業の指定を受け、当時の建造物の復元や一帯の公園整備に取り組み、観光港として再興した。

2001年（平成13）11月「土木学会選奨近代土木遺産」に認定され、翌年12月には、石積み埠頭、排水路3箇所および4基の道路橋が国指定重要文化財になった。さらに三角西港は、2009年（平成21）に九州・山口の近代化産業遺産群の一つとして世界遺産暫定リストに追加掲載され、2013年（平成25）9月、政府は2015年夏の世界文化遺産登録を目指し、国連教育科学文化機関（UNESCO）に三角西港を含む「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」を推薦する方針を固めた

(4) ワークショップ全体の概要

筆者らは2013年（平成25）9月より、この三角西港の文化的景観保全に関する取り組みに参加することになり、図-2に示すようなワークショップ（以下、WSと略）を実践することになった。宇城市役所庁内WSと三角西港市民WSを、時期をずらして襍がけに開催することで、自治体職員と三角西港の地域住民との協働を促進することを大目的とした。WSでは、講師は筆者らが務め、運営は宇城市教育委員会文化課及び世界遺産推進室が、熊本大学の協力を得て実施した。

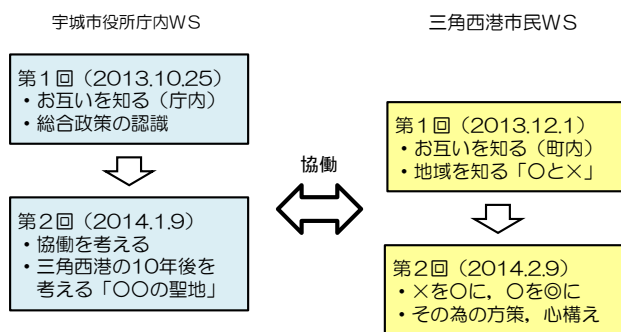


図-2 市民と行政とWSの位置づけ

a) WSの趣旨

いずれのWSにおいても、以下の全体趣旨を説明した。「2013年9月20日に政府の世界遺産条約関係省庁連絡会議において、三角西港を含む「明治日本の産業革命遺産 九州・山口と関連地域」のユネスコへの世界遺産推薦が正式に決定しました。来年の夏に予定されているイコモス現地調査を経たのち、平成27年にはユネスコ世界遺産委員会で世界遺産登録についての審議が行われま

す。宇城市では今年8月に宇城市景観計画を策定し、三角西港周辺については、「三角西港文化的景観地区」として、将来にわたって現在の景観を保全すべき景観形成地域に指定されています。さらに、「重要文化的景観」として国からの選定を受けるべく、保存調査と保存計画の策定を進めているところです。

文化的景観とは、文化財保護法で規定された文化財の新たな類型であり、「歴史、自然環境、生活・生業」の観点から、現在まで受け継がれてきた暮らしを含めた景観自体を文化財としてとらえるものです。この文化的景観は、そこで暮らす人々にとっては、当たり前のように認識されており、その価値を正しく理解し将来にわたって保全していくためには住民と行政が連携して取り組むことが必須とされ、これは持続可能な地域づくりそのものです。実際、文化的景観保全による地域活性化の先進事例も紹介されているところです。」

b) 庁内WSの目的

庁内WSにおいて、行政職員に対しては、以下の説明を行った。「本WSでは、宇城市役所の若手職員の皆様を対象に、三角西港を知って頂くこと、それぞれのご専門に関わらず文化的景観保全、まちづくりの実践への理解、気づきを得て頂くことを目的としたグループワークを行って頂きます。」

c) WSの概要

市民WSにおいて、地域住民に対しては、以下の説明を行った。「ユネスコの世界文化遺産、国選定重要文化的景観選定を目指す三角西港及び三角地域において、今後どのようなまちづくりが必要となるのか、何を大切にすればいいのか、地域の皆さま、行政、各種専門家と一緒に考えるWS（座談会）を計画いたしました。このWSでは、地域住民の皆様が、三角西港という港に対してどのように考えておられるのか、三角西港という「まち」における暮らしぶりを教えて頂きたいと思います。」

d) WSの参加者

今回分析対象とした4回のWSでは、3種類各2タイプずつ、計6タイプのステークホルダーがいる。

- ①地域住民A：区長レベル。これまでも三角西港地域全体のことを考えてきており、まちづくりへの関心も高い。
- ②地域住民B：一般の地域住民の方々。
- ③行政A：文化的景観保全を担当する宇城市教育委員会文化課の職員。三角西港地域のこと、文化的景観保全の仕組みを理解している。
- ④行政B：今回庁内WSに参加した一般的な宇城市役所の職員。有志の方々が、市民WSにも参加して下さった。
- ⑤アソシエーションA：専門家（田中・徳永）
- ⑥アソシエーションB：熊本大学の学生。研究室にて、文化的景観保全の仕組み、まちづくりのことをある程度学習しているが、三角西港地域はほとんど知らない。

WSでは、以上の6タイプの参加者それぞれに「学び」があった。本研究では、特に②地域住民Bと④行政Bの学び得た実践知に注目して、WS全体を分析した。

3. 個々のワークショップの意図と成果

本章では、2回ずつ開催した、宇城市役所庁内WS、三角西港市民WSの、それぞれのWSについて、そのコンセプト（活動目標と学習目標）¹³⁾、運営プロセス、成果についてまとめた。WSのコンセプトは、WSで得られた実践知を分析する際に有用と考え、山内らの定義「〇〇を創ること（活動目標）で、△△を学ぶ（学習目標）」に準拠した。

(1) 第1回宇城市役所庁内WS

日時：10月25日（金）午前9時～午前11時

場所：庁舎新館第3会議室 参加者：48名

a) WSの次第

- 9:00 趣旨説明：文化的景観保全と官民協働の地域づくり、庁内連携の重要性（田中尚人・徳永哲）
- 9:20 ワールドカフェWS「三角西港において連携したいこと、してみたらいいと思うこと」
- 10:20 全体の振り返り
- 10:40 個人の振り返り

b) WSのコンセプトと概要

「庁内連携手法 × 三角西港地域との関わり方」

ワールドカフェ形式のWSでは、テーブル毎にはファシリテーターを置かず、カフェにいるような気楽な雰囲気、1つのテーマについて参加者全員が話し合う。今回のテーマは、「三角西港が世界遺産になるに当たって、宇城市役所職員が連携したいこと、連携したらいいと思うこと」とし、「できない理由を考えるのではなく、できることを見つけよう」を合い言葉とした。

1テーブルは4～5名、話し合った内容は、テーブルクロスに見立てた広用紙に描き込んでいく。15分を1ラウンドとして、テーブルチェンジを行い、今回は4ラウンド行った。テーブルチェンジの際には、テーブルにつき、一人その場に残って、次回の最初に前回そのテーブルで何が話されたのかを1分程度説明する「ホスト」を残し、各人がなるべく多くの方々と話しかけることに気をつけて、テーブルを渡り歩いていく。

広用紙をアイデアで埋めきってもらうことを目標として、4ラウンド終了後に最初に座っていた席に戻って頂いた。各テーブルで発表するようなことはせず、自分たちが出したアイデアの上に、どのようなアイデアが積み重ねられたのかをテーブル毎に反芻して頂いた後、個人で振り返りアンケートに記入して頂いた。

c) 振り返りアンケートより

①WSの感想

主なものを以下に列記した。

- ・そもそも、三角西港のことをよく知らない
- ・宇城市の合併の影響がまだある
- ・連携のアイデアは、たくさん出た
- ・三角西港が世界遺産になることに協力したい

②連携のアイデア

- ・健康増進×スポーツ
- ・フットパスコースの開発（既に3コースあり）
- ・職員向け三角西港ツアー
- ・天草との連携が必要なのでは？
- ・朝市、地域住民と観光客との交流促進
- ・西港と東港との連携も必要 シャトルバスの運行
- ・子供から高齢者まで楽しめるマリンスポーツを
- ・三角西港を題材としたアニメや映画、ゆるキャラ、特産品の開発
- ・「三角西港おもてなし課」設置



写真3 WSの風景

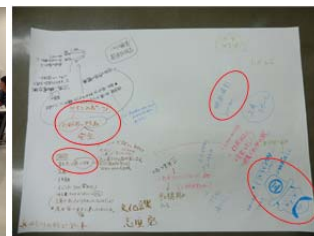


写真4 WSの成果物

(2) 第1回三角西港市民WS

日時：12月1日（日）10時～12時

場所：三角西港集会所 参加者：18名

a) WSの次第

- 10:00 趣旨説明（田中尚人）
- 10:10 三角西港の魅力と文化財的価値
松村浩一（宇城市教育委員会世界遺産推進室）
- 10:20 三角西港とまち一重要文化的景観、世界文化遺産の選定地域になると（徳永哲）
- 10:30 WSの説明（田中尚人）
- 10:40 WS「三角のまちの〇と×」.
- 11:40 振り返り

b) WSのコンセプトと概要

「三角西港の〇と×（自地域の特徴を客観的に把握する）
× まちづくりへの関わり方」

WSでは、10年後には、ユネスコの世界文化遺産になっているはずの文化財「三角西港」を抱く三角西港のまちの「〇：いいところ、お薦めスポット、美味しいもの、人の考え方等」と「×：いまいちなところ、残念なところ、不安に思っていること等」をプレーストリーミング形式で付箋に書き出し、各テーブルで共有した後、KJ法を用いて、図解し発表する形式とした。

テーブル毎のファシリテーターには、宇城市役所庁内WS参加者からの有志4名と熊本大学学生が担当した。

WSの前半で地域住民から「『三角のまち』とは言わない、三角西港とは港だけじゃなく、まちも含む呼び方である」という指摘を受け、WS名を修正した。

c) 振り返りアンケートより

①WSで良かったこと：

5人の参加者が「皆の意見が聞けたこと（議論ができたこと）」を挙げており、WSについては好評だった。

②三角西港で一番の心配事：

少子高齢化などを憂いつつ、交通の便が悪いこと、観光交通の量、駐車場不足などを挙げていた。

③次回のWSまでにやること：

それぞれが能動的に提案していたので、以下列記する。いいこと10個考える／提案を考える／悪いところを考え直す／一緒になって考えていく／良いことを活かし、欠点を減らす／西港のことをもっと知ってもらう



写真-5 WSの風景

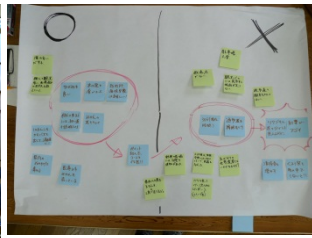


写真-6 WSの成果物

(3) 第2回宇城市役所庁内WS

日時：2014年1月9日（金）15時～17時

場所：庁舎新館第3会議室 参加者：42名

a) 前回WSの振り返り

前回の庁内WSには多数の若手職員が参加し、参加者の多くから、所属部署を超えた事業連携についての活発かつユニークな意見が出された。また12月1日には、三角西港の地権者・地域住民を対象としたWSを開催し、庁内WS参加職員の中から有志4人が、地域住民と一緒に「10年後の三角西港」について語り合った。

今回は、地域住民との協働に対する市役所職員の動機づけ、市民との協働のカタチを考えることを目標にWSを行う。

b) WSの次第

15:00 趣旨説明：三角西港のまちづくりにおける宇城市職員の役割（田中尚人）

15:15 「行政と地域住民との連携が目指すもの」事例紹介（徳永哲）

15:30 前回の振り返り

15:40 ワールドカフェWS
「10年後、三角西港で聞かれる会話」

16:30 書き初めWS「〇〇の聖地 三角西港」

16:45 振り返り

c) WSのコンセプトと概要

「市民との連携手法 × 三角西港地域との関わり方」

前回の振り返りでは、「初めて会った人たちと話せてよかった」など、各人のWSに対する参加の意欲が高く、WSをやる前から既に良い雰囲気が醸成されていた。さらに、三角西港WSでの有志の方々の活躍もご紹介し、庁内連携や宇城市役所の各課に対する、地域住民の方々の期待なども説明した。

前回同様に、ワールドカフェ方式のWSを行い、そのテーマは、「10年後、三角西港で聞かれる会話」さらに、「そのために私ができること、やりたいこと」を考えて頂いた。タイムスリップしたように、またご自身だけでなく、地域住民の方々がどう感じておられるか、なども想像して頂き、噂話のように語って頂いた。

さらに、オブザーバーとして参加して頂いていた九州大学芸術工学部の藤原恵洋先生から、振り返りのまとめとして、書き初めWS「〇〇の聖地 三角西港」というお題を頂き、各人が「〇〇の聖地にすぞ！」という意気込みを書き初めして頂いた。

d) 振り返りアンケートより

①WSの感想

- ・多くの意見、考え方が聞けて楽しかった（13）
- ・普段会わない、他の課の人と話せてよかった（7）
- ・楽しい未来の話ができてよかった（4）

など、肯定的な意見が聞かれた。（ ）内は回答者数

②連携のアイデア

- ・プロジェクトチームや特命チームの編成（6）
- ・定期的に、このようなWSを実施する（2）
- ・映画などのロケ地の誘致（2）

などが複数回答のあったアイデアであった。

③三角西港が世界遺産になることに対して

肯定的な意見が多かったが、不安を感じたり、情報不足を指摘する意見もあった。「世界遺産になってよかった、と言えるような取り組みをしたい」というニュアンスの意見が多かった。



写真-7 WSの風景

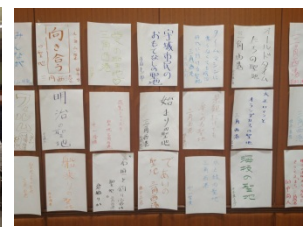


写真-8 書き初めWS

(4) 第2回三角西港市民WS

日時：2月9日（日）11時～13時

場所：三角西港集会所 参加者：25名

a) 前回WSの振り返り

世界遺産になる「10年後の三角西港」に対して、そ

もそも今の三角西港という「まち」について、地域の暮らしについて知っておくために、昨年12月前回の市民WSでは「三角西港の〇と×」について考えた。

今回は、もう一度「三角西港の〇と×」を参加者全員で振り返り、「×は〇に、〇はもっといい〇になるように」地域住民と有志の行政職員の方々と協働して考えることを目的にWSを実施する。

b) WSの次第

- 11:00 開会（小田原教育部次長）
- 11:05 趣旨説明（田中尚人）
- 11:10 前回WS「三角のまちの〇と×」振り返り、シール投票
- 11:30 WSの説明（田中）
- 11:40 WS「10年後×を〇に、〇を◎にするために」
- 12:20 各テーブルで発表
- 12:40 振り返り

c) WSのコンセプトと概要

「まちづくり施策を考える × まちづくりへの関わり方」今回は、2種類のWSを実施する。前半は、前回の「三角西港の〇と×」を振り返る。前回の振り返りシートをまとめ、三角西港の〇と×の上位10位までを応用紙に書き出し、参加者にシールで投票してもらった。その上で4テーブルに分かれ、「10年後×を〇に、〇を◎にするために」をテーマとして、プレスト+KJ法のWSを実施した。前回同様、各テーブルのファシリテーターには、宇城市職員有志と熊大大学学生が担当した。



写真9 WSの風景



写真10 〇と×の振り返り

d) 振り返りアンケートより

①WSで良かったこと：

6人の参加者が「各人の考え方がよく知れた、話し合いができた」を挙げており、それ以外にも「地元の方々と学生の協働で、賑わう三角になって欲しい」「自分たちでできることがあった」「空き家対策など実践的なことに関わりたい」などとのコメントが複数あった。

②三角西港で一番の心配事：

交通の便が悪いこと、少子高齢化、人口の流出、特に若い人材の流出を気にしておられた。

③三角西港で大切にしたいこと：

8名の参加者が「人のつながり、住民同士の話し合い、みんな仲良く、団結力」を大切にしたいこととして挙げた。自然環境の良さ、行政との協働をあげていた。

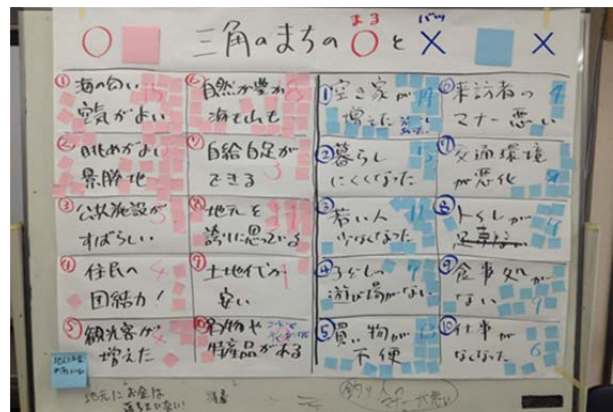


写真11 三角西港の〇と×の振り返り結果

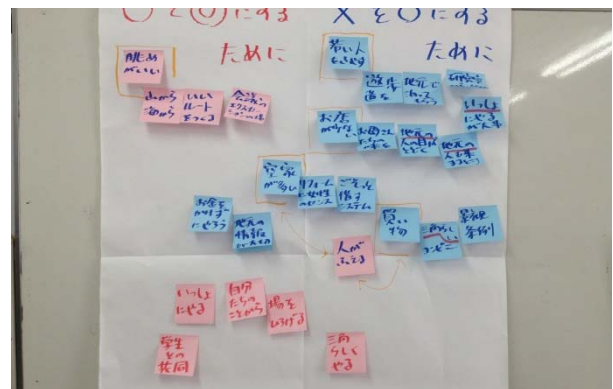


写真12 〇を◎に、×を〇にするWSの成果

写真-12 に示したように、WSの成果では、「学生との共同（協働）」「いっしょにやる」「自分たちのことから」「場をひろげる」「三角西港らしくやる」などの活動指針が、市民の意見として出た。

4. ワークショップに関する実践知の分析

(1) 宇城市役所庁内WS

庁内WSでは、まず多くの若手職員が参加したことが特筆に値する。1回目は告知まで一ヶ月もなかったにも関わらず48名の、また2回目は正月早々だったにも関わらず42名の参加者が得られ、皆笑顔に溢れ、楽しそうにWSを実践した。

WSの活動目標を「庁内連携手法を創る」から「市民との連携手法を創る」に変化させたことにより、学習目標は2回とも変えず「三角西港地域との関わり方を学ぶ」としたにも関わらず、WSの学びとして、第1回では「まず、市役所職員同士話せて良かった」というレベルだったのに対し、第2回には「具体的な連携方策や、市民との連携に必要な心構え」にまで気づきが及んだ。

庁内WSでは、一般の職員以外にも、事務局として運営に当たった文化的景観保全を担当する職員の方々にも、「こんなに、一般の職員が三角西港に興味を持ってくれ

たり、積極的に関与する姿勢を見せてくれてうれしい」などの感想を得ることができ、ここにも学びがあったことが推察される。

両回とも、たくさんの、いつも会わないような他部署の行政職員と、楽しく、話せたことがWSの振り返りの中で高く評価されており、第2回の振り返りでは、「プロジェクト・チーム」の結成が支持されるなど、WS参加者の中から出た「有志」のようなリーダーを通じて、庁内連携の素地が形成されたのではないかと推察される。一方、三角西港や世界文化遺産、文化的景観に関する正しい情報が、庁内で共有されにくいことも指摘された。

(2) 三角西港市民WS

市民WSでは、第1回の開催時には18名の参加者でスタートしたが、第2回には、第1回の時の参加者が「友達を連れてきた」と言っていたように参加者が増加し25名となり、両回とも参加者が熱心に議論していた印象を受けた。

WSの活動目標は、第1回は「三角西港の○と×（自地域の特徴を客観的に把握する）」と自地域の身近な環境に目を向ける作業から入り、第2回では、十分に第1回の振り返りを行った後、「まちづくり施策を考える」と高度化した。学習目標は2回とも「まちづくりへの関わり方」とし、当事者としての意識の醸成と、気づきにくい身近な生活環境への関わり、についての気づきや学びを促した。

市民WSでは、第1回で参加者に問うた「三角西港の○と×」を、第2回WSにてもう一度確認し、共感を得てから、4チームに分かれて「10年後×を○に、○を◎にする」提案を聞いた。第1回の市民WSでは、区長レベルの参加者で多かったため、一般の地域住民の参加が増えた第2回においても「三角西港の○と×」を再度確認し、それぞれの班で能動的なアイデアが、三角西港のまちづくりの「活動指針」に繋がるような形で抽出された。区長レベルの参加者のみならず、一般の地域住民から、「自分たちのことから」「場をひろげ」という活動指針が得られ、「三角らしさ」というキーワードが、WSの終了時には、会場全体で共有されていた。

(3) 市民と行政との連携の視点からの分析

第1回目の庁内WSでは、「はじめて他部署の人と話し合った」、「そもそも三角西港について知らない」などの声もあがり、参加者同士で「三角西港について学習する重要性」や「部署を越えた連携の重要性」が指摘された。こうした能動的なWS参加者の中から、有志の3名が第1回市民WSにおいて、テーブルファシリテーターとして参加した。熊本大学の学生や若手行政職員のファシリテーションは、市民には好評で協働過程への自然

な導入に繋がったと言える。

第2回の庁内WSでは、市民WSの結果報告に対して参加者の理解や反応もよく、地域住民の三角西港に対する認識を知ったうえで、「10年後を楽しく想像できた」などの感想も寄せられた。庁内連携の具体策としては、「庁内連携WSの継続」や「プロジェクトチームの結成」が支持された。引き続き有志の協力を受け、第2回の市民WSでは、持続可能な地域づくりを行うために、若手行政職員らのアイデアも参照しながら、10年後の三角西港のヴィジョン、またその地域像に近づくためのアプローチを物語る練習を行った。そして、市民の導き出したキーワードから、「（誰かと）いっしょに」「自分たちのことから」「場をひろげ」「三角西港らしくやる」という、活動指針が導くことができた。

地域住民はWSの当初、少なからず外部からの参加者に期待を寄せていた。これに対して、テーブル・ファシリテーターとして参加した行政の有志や熊本大学の学生が、通常のテーブル・ファシリテーターよりも「よそ者」の立場を取り、地域のことを学びながら、WSにも参加したことで、地域住民は「自分たちの地域が注目されている」「自分たちの暮らしが文化的景観の重要な鍵だ」ということに気づき、一人一人が、自らの故郷三角西港のことをよく知り、まちづくりに関わる気持ちを醸成することに成功したことが重要な意味を持つ。専門家や担当の行政職員には難しかった、地域住民の積極的なまちづくりに対する実践知を形成した要因は、テーブル・ファシリテーターが担っていた、と推察できる。

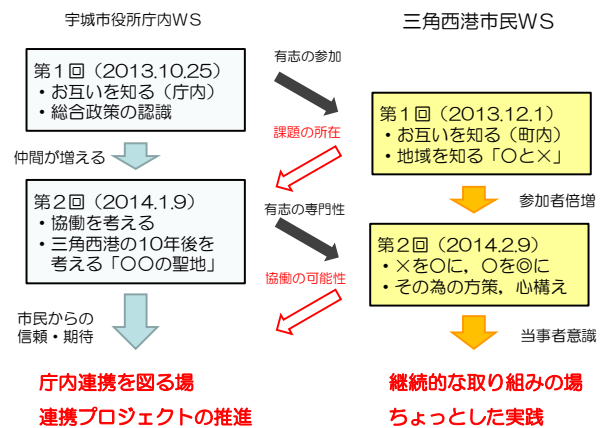


図-3 市民と行政との連携過程

(4) まとめと今後の課題

本研究では、三角西港の文化的景観保全活動の一環として開催されたワークショップを題材に、参加者の動機付け、成果物の提示なども含めたワークショップ・デザインから、その運営、関係者との情報共有まで、一連の地域住民と基礎自治体との協働の場づくりで得られた実践知に関して、できるだけ定性的に分析した。

研究の成果として、6タイプのWS参加者、それぞれの学びを分析するとともに、WSの主な参加者である一般的な行政職員、地域住民の方々には、行政と地域住民との協働によって文化的景観保全をきっかけとしたまちづくりの機運がみられ、特に市役所有志と大学生、地域住民との協働によって、市民WSでは「誰かといっしょに、自分たちのことから、場をひろげ、三角西港らしくやる」という活動指針を得ることができた。

本研究はアクションリサーチ形式のため、筆者らは、できるだけ客観的に「事実」を切り取る努力を試みてはいるが、内省的な部分がないわけではない。しかし、宇城市役所や三角西港の地域住民の方々には、これらの成果を確認させて頂いており、彼ら/彼女らの気づきとしてお認め頂いていることから、客観性を得たものとして研究論文として発表するものである。

このようなアクションリサーチ研究、ワークショップからの実践知を分析する研究手法を、より精緻化する必要があることを認め、今後の課題とする。

謝辞：本研究は多くの方々のご協力によっている。ワークショップに参加して下さった三角西港の地域住民の方々、宇城市役所の方々、特に宇城市教育委員会 世界遺産推進室松村浩一様、藤田正臣様、同文化課神川めぐみ様には、資料提供やWSの運営にたいへんご協力頂いた。また、実際の文化的景観保全業務やWSの運営には、エスティ環境設計研究所武藤由美子様、熊本大学工学部社会環境工学科地域風土計画研究室の学生たちにも協力頂いた。記して、感謝の意を表す。

参考文献

- 1) 松浦晃一郎, 世界遺産 ユネスコ事務局長は訴える, 講談社, 2008. 6.
- 2) 奈良文化財研究所, 文化的景観研究集会 (第1回) 報告書, 2009. 12 から (第5回) 報告書, 2013. 12 まで
- 3) 奈良文化財研究所, 文化的景観保存計画の概要 (I), 文化的景観資料集成第1集, 2010. 3.
- 4) 宇城市教育委員会, 重要文化財三角旧港 (三角西港) 施設保存活用計画, 2013. 3.
- 5) 宇城市教育委員会, 三角浦の文化的景観調査報告書 保存計画書, 2014. 3.
- 6) 小林一郎, 石積埠頭に関する築港技術等に関する調査報告書, 2011. 3.
- 7) 茶谷幸治, 「まち歩き」をしかける コミュニティ・ツーリズムの手ほどき, 学芸出版社, 2012. 8.
- 8) 伊藤雅春・大久手計画工房, 参加するまちづくり ワークショップがわかる本, 農山漁村文化協会, 2003. 9.
- 9) 中野民夫, ワークショップ—新しい学びと創造の場—, 岩波書店, 2001. 1.
- 10) ティム=ブラウン・千葉敏夫訳, デザイン思考が世界を変える イノベーションを導く新しい考え方, 早川書房, 2010. 4.
- 11) 大和田順子, アグリ・コミュニティビジネス 農山村力×交流力でつむぐ幸せな社会, 学芸出版社, 2011. 2.
- 12) 井上典子・染井純一郎, 食と景観の地域づくり 小さな活動からネットワークへ, 学芸出版社, 2013. 3.
- 13) 山内祐平・森玲奈・安斎勇樹, ワークショップデザイン論—創ることで学ぶ—, p. 42, 慶應義塾大学出版会, 2013. 6.

(2014. 8. 1 受付)